

福岡県の主な農産物の生産状況

令和3年10月15日現在
(専技情報より抜粋)

◇普通期水稻（夢つくし、元気つくし、ヒノヒカリなど）◇

9月25日付けの作況指数は、全国は平年並みの100、九州はやや不良の96、福岡県も8月の大雨や日照不足の影響で、やや不良の95でした。

品質は、乳白米等が少なく、1等米比率は平年に比べてやや高い見込みです。

「元気つくし」は収穫終了しました。

「ヒノヒカリ」は、収穫中で、10月15日頃終了の見込みです。

10月14日頃から「実りつくし」、「ヒヨクモチ」の順で収穫予定です。

「ヒノヒカリ」では、紋枯病の発生や台風14号による強風の影響で一部倒伏が見られ、登熟期前半の日照不足により登熟がやや劣ることから、収量は平年よりやや低い見込みです。

「ヒノヒカリ」以降の品種は、出穂後の積算気温と黄褐色籾比率、籾水分を確認して適期収穫に努めましょう。

縞葉枯病発生地帯では稲株のすき込み、休耕田の耕起や畦畔の雑草管理を行いましょう。

◇大豆（フユカ）◇

現在、子実肥大期です。

8月の長雨に伴う湿害により、主茎長は平年より短く、莢数は少ないです。

台風14号に伴う強風より倒伏が発生し、9月下旬からの高温乾燥により、粒肥大の抑制が懸念されます。

アサガオ類やヒユ類などの雑草が多発したほ場が散見されます。

大型雑草は、汚損粒発生防止や効率的な収穫作業の実施のため、早めに除去しましょう。

落葉期を迎えたら暗きよの栓を開け、排水を促しましょう。

収穫ロス、汚損粒の発生軽減のため、コンバインにリフターキットを装着する準備を行いましょう。

◇イチゴ◇

9月以降の高温傾向により、生育は、早期作型、普通期作型とも昨年よりやや早いです。

また、高温傾向で草勢も強まってきており、2番果房対策としてのかん水制限等

による生育抑制が、継続して実施されています。

早期作型（9月10～15日頃定植）の開花は、定植日の早いものから順に始まっており、出荷は11月上旬から始まる見込みです。

株の生育に応じて、遮光処理やかん水制限等での生育抑制による2番花房対策を引き続き徹底しましょう。

摘葉後にハダニ類の対策を徹底しましょう。

炭疽病が多発した場合は、秋ランナーなどを活用し親株を更新しましょう。

◇ナシ◇

現在晩生種の出荷終盤です。

出荷量は、前年度より多く、平年並みでした。

増加の要因は、「幸水」「豊水」及び晩生種とも概ね結実、肥大が良く、病害虫等の被害が少なかったと考えられます。

病害虫は、カイガラムシの発生がやや多いです。

次年度の生産に向けて、秋季せん定、黒星病や越冬害虫等の秋期対策の徹底を図りましょう。

◇イチジク◇

収穫は無加温ハウスではほぼ終了、露地では7割程度終了です。

出荷量は、春先より前倒し傾向で推移し、8月中旬の多雨により、疫病や腐敗果が発生し一時減少しました。

9月以降の出荷量は、天候安定に伴い回復傾向で推移しています。

露地の出荷は、11月上旬終了の見込みです。

病害虫は、9月以降、各産地でショウジョウバエの発生が多いです。

腐敗、カビ、裂果対策、として、適期収穫、適正な選果、予冷等の鮮度保持対策を図りましょう。

収穫が終了した施設栽培では、過乾燥による根傷みを防止するため灌水を徹底しましょう。

◇トルコギキョウ◇

夏季出荷作型（6～9月出荷）は終了です。

出荷量は、作付面積の減少により大きく減少しました。

販売単価は、他の草花の入荷も少なく、平年よりも高くなりました。

秋出荷作型（10～12月出荷）の生育は、9月以降好天に恵まれ順調です。

8月の曇天や高温多湿でチップバーンは多いが、発蕾以降日射量が多くブラッシングは少ないです。

出荷ピークは、10月下旬から11月上旬となる見込みです。

日中は換気に努め茎葉の締まった株づくりを行ういましょう。

11月出荷分は10月下旬から15℃加温を行い、出荷時の品質向上を図りましょう。

斑点病、灰色かび病、夜蛾類の対策を徹底しましょう。

◇豚・鶏◇

9月の豚枝肉価格は、緊急事態宣言の延長で外食需要が落ち込み、小売りの動きが悪くて前年比92%、過去5年平均比97%と低値でした。

鶏卵価格は、暑さの緩和による家庭内需要の増加で前年比131%、過去5年平均比113%と高値でした。

家畜伝染病発生予防のため、農場の衛生管理を徹底しましょう。

稲WCSや稲わら収穫、牧草の播種作業等、労働負荷が掛かる時期であるため、農作業事故に注意しましょう。